

金山寺味噌の発酵過程に関わる微生物群の解析

池 晶 子

和歌山県湯浅町の金山寺味噌は、大豆や米、大麦などを原料とする麴に茄子や瓜などの野菜を漬け込んで発酵させ、そのままおかずとして食す「なめ味噌」の一種である。通常の味噌と発酵工程を異にする金山寺味噌を対象とし、発酵中の微生物群の挙動にどのような特徴があるのかを調べた。金山寺味噌の発酵では、通常の味噌発酵と同様、糸状菌、酵母、乳酸菌の協働が見られた。発酵過程で優占する微生物が糸状菌から酵母へと交代し、乳酸菌によるpH低下と雑菌抑制の働きに支えられている。一方で、酵母や乳酸菌は、味噌よりも野菜の漬物にみられる菌種構成に近く、味噌と漬物の間隔的な特性を持つことが示唆された。

ライフコースにおける子ども期の変容と家族関係

—ヨーロッパ中世の子ども期と産業革命期の児童労働—

渋谷 光 美

ライフコースは、歴史的時間にも制約されているが、本稿では子ども期に着目した。中世ヨーロッパおよび近代産業革命期における、生命保障のない子ども期、児童労働による心身状況、生活環境や家族関係等を検討した。ヨーロッパの中世社会では子ども期という認識がなく、今日では自明とされる子ども期が、時代的制約を受ける可変的位置づけであることを明示した。その本質的観点からすれば、産業革命期の過酷な児童労働は、子ども期の人間としての尊厳をふまえた発達には寄与せず、弊害をももたらし、またそのような子どもが属する家族は、子ども期に関心を向けられない家庭意識へと変容していた実情が認められた。

韓国の大学生の食生活状況と学生食堂の利用について

李 温 九

大学生の食生活を調べる目的で、今回は韓国の大学生の朝食および昼食摂取状況と学生食堂利用について調査を行った。韓国の大学生の健康への意識は低い傾向で、朝食の欠食率も高かった。4割程度の学生が朝食を全く食べておらず、2割程が週に1～2度しかとっていなかった。しかし、昼食の欠食率は低く、7割以上の学生が毎日摂取していた。昼食の形態として学生食堂を利用するより、コンビニおよび購買部の食品購入や大学周辺の飲食店を多く利用する傾向であった。弁当の持参率は低かった。学生食堂は学内にある便利さから利用しているが、味への不満や昼休み時間帯に集中する混雑を理由に利用しない学生も多かった。

青年海外協力隊栄養士隊員の継続派遣事例における栄養改善活動評価の試み

氏 家 真 梨

青年海外協力隊の派遣事例における栄養改善活動評価において、ボランティア活動報告書が中長期派遣事例の活動評価に用いることの妥当性について検討を行った。評価は、プロジェクト・サイクル・マネジメント手法を用い、栄養改善の活動記述部分をPDCAサイクルの項目に分類し、活動実施内容「Do」にあたる記述部分に対する事前・事後の評価についての記載状況を調査して行った。継続派遣事例では6～10年近くの中長期的な支援事例があった。しかし具体的な活動をPDCAサイクル項目に当てはめた活動評価では、派遣隊員ごとの活動評価は可能だが、前任者の活動の成否から繋がるアウトカムは見出せなかった。ボランティア活動報告文章中から明確な栄養改善活動の評価は難しいと示唆され、今後の展開として、客観的で共通化可能な評価指標の設定と評価方法の実践に向けた取り組みが必要であると考えられる。その実現の先には、ボランティア活動報告書が青年海外協力隊の栄養改善活動において有効なだけでなく、今後も蓄積されていく膨大な資料が日本人管理栄養士の世界への貢献度を、広く世界に指し示す事も可能と考えられる。

高校生アスリートにおけるフードトレーニングサービスを活用した栄養サポートの有効性について

片山真子

高校生男子アメリカンフットボール部選手の増量を目的として、保護者にSNS（LINE@）を介した日々の食事に対するコメント対応、高校生アスリート向け夕食メニューとレシピ配信などのフードトレーニングに参加してもらい、その有効性を検証した。結果、全員の体重、除脂肪量、体脂肪量が増加し、増量を達成できた。介入前後でエネルギー、栄養素の摂取量は全て減少したが、必要量を上回っていた。介入後のアンケートでは全体の満足度も高く、本栄養サポートは有効であった可能性が示唆された。今後は、既存のコンディショニングアプリを活用するなど連絡ツールを見直し、過去に栄養教育を受けた経験のない対象者に対して、介入期間を延長して検証したい。

A Comparative Study of German and Japanese Historical Reconciliation with Neighbouring Countries (Part I)

歴史和解の比較研究

—ドイツと日本を事例に— (前編)

MIZUKAI Maki

This thesis will evaluate Germany's and Japan's reconciliation processes from a comparative perspective. It is concluded that the relative success of Germany's reconciliation is because of the pragmatic reasons such as security, economical prosperity and the Cold War. Particularly, the commitment to European integration became one of the strongest incentives for Germany to reconcile with its neighbours. The process of reconciliation in Japan was slower than that of Germany, because of the continuity of political leaderships, impact of atomic bombings, geopolitical environment and other factors. While there is no universal model for reconciliation, it can be said that reconciliation is a long term process which can only be achieved through the coordination of the various actors from the top level to the grassroots level of the structure of the society.